城の崎にて（志賀直哉）　＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50 点］

自分の部屋は二階で、隣のない、わりに静かなアザシキだった。読み書きに疲れるとよくイエンの椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所がウ羽目になっている。その羽目の中に蜂の巣があるらしい。エ虎斑の大きな太った蜂が天気さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しそうに働いていた。蜂は羽目のあわいからすり抜けて出ると、ひとまず玄関の屋根に下りた。そこで羽や触角を前足や後足で（　a　）調えると、少し歩き回るやつもあるが、すぐ細長い羽を両方へ（　b　）張ってぶーんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなって飛んでいく。植え込みのやつでの花がちょうど咲きかけで蜂はそれに群がっていた。自分はオタイクツすると、よくカランカンから蜂の出はいりを眺めていた。

ある朝のこと、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。足を腹の下に（　c　）つけ、触角は（　d　）顔へ垂れ下がっていた。他の蜂は一向に冷淡だった。巣の出はいりに忙しくその脇をはい回るが全く拘泥する様子はなかった。忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きているものという感じを与えた。その脇に一匹、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずにうつむきに転がっているのを見ると、それがまた（　e　）死んだものという感じを与えるのだ。それは三日ほどそのままになっていた。それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。他の蜂がみんな巣へ入ってしまった日暮れ、A冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見ることは寂しかった。しかし、それは（　e　）静かだった。

夜の間にひどい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根もきれいに洗われていた。蜂の死骸はもうそこになかった。今も巣の蜂どもは元気に働いているが、死んだ蜂は雨どいを伝って地面へ流し出されたことであろう。足は縮めたまま、触角は顔へこびりついたまま、たぶん泥にまみれてどこかでじっとしていることだろう。外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは死骸はそこにじっとしているだろう。それともありにひかれていくか。Bそれにしろ、Cそれはいかにも静かであった。せわしくせわしく働いてばかりいた蜂が全く動くことがなくなったのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた。

問一　二重傍線部**ア**～**カ**の片仮名は漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

問二　空欄部ａ～ｄに当てはまる語を、次の**ア**～**エ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　だらしなく　**イ**　ぴったりと　**ウ**　しっかりと　**エ**　丁寧に

問三　波線部Ａ「冷たい瓦の上」と同じ場所を指している語を、本文中から五字以内で抜き出しなさい。

問四　空欄部ｅに共通して当てはまる語を、本文中から抜き出しなさい。

問五　波線部Ｂ、Ｃの「それ」の内容として適当なものを、次の**ア**～**エ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　蜂の死骸
イ　蜂の死骸がありにひかれていくこと
ウ　せわしく働いていた蜂
エ　外界の変化が蜂に起こること

問六　「自分」は蜂の死に対してどのような思いを抱いているか。適当なものを、次の**ア**～**キ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　恐怖　**イ**　安らぎ　**ウ**　嫌悪　**エ**　空しさ　**オ**　はかなさ　**カ**　いらだち　**キ**　理想

問七　次の問いに答えなさい。

1　志賀直哉と関係の深いものを、次の**ア**～**オ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　新思潮派　**イ**　アララギ派　**ウ**　自然主義　**エ**　白樺派　**オ**　新感覚派

2　志賀直哉の唯一の長編小説を、次の**ア**～**オ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　「和解」　**イ**　「こころ」　**ウ**　「伊豆の踊子」　**エ**　「暗夜行路」　**オ**　「人間失格」

問 七	問 六	問 五	問 四	問 三	問 二	問 一
1		B			a	ア
2		C			b	
					c	イ
					d	
						ウ
						エ
						オ
						カ

学 年
組
番 号
氏 名
得 点

城の崎にて（志賀直哉）　＊

〔出題の意図と留意点〕　作品の前半部の基本的な読み取りを確認することを目的として出題した。問二～問五を経過させることによって、この作品の文体の特徴に少しでも注目させることができればよいだろう。問六は作品テーマに結びつく部分だが、「基本問題」なのでこのような設問にした。

☆解答例と配点

問一　**ア**　座敷　**イ**　縁　**ウ**　はめ　**エ**　とらふ
問二　ａ　エ　ｂ　ウ　ｃ　イ　ｄ　ア　〈2点×4〉
問三　玄関の屋根（五字）〈5点〉
問四　いかにも　〈5点〉
問五　**Ｂ**　イ　**Ｃ**　ア　〈4点×2〉
問六　イ　〈8点〉
問七　**１**　エ　**２**　エ　〈2点×2〉
オ　退屈　**カ**　欄干　〈2点×6〉
計50点

城の崎にて（志賀直哉）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

そんなことがあって、またしばらくして、ある夕方、町から小川に沿うて一人だんだん上へ歩いていった。山陰線のトンネルの前で線路を越すとミチハバが狭くなって道も急になる、流れも同様に急になって、イジンカも全く見えなくなった。もう帰ろうと思いながら、あの見える所までというふうに角を一つ一つ先へ先へと歩いていった。物が全て青白く、空気の肌触りも冷え冷えとして、物静かさがかえって何となく自分を（　a　）させた。大きな桑の木が道端にある。向こうの、道へ差し出した桑の枝で、ある一つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている。風もなく流れの他は全て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。自分はフシギに思った。多少コワい気もした。しかし好奇心もあった。自分は下へ行ってそれをしばらく見上げていた。すると風が吹いてきた。そうしたらその動く葉は動かなくなった。原因は知れた。何かでこういう場合を自分はもっと知っていたと思った。

だんだんと薄暗くなってきた。いつまで行っても、先の角はあった。もうここらで引き返そうと思った。自分は何気なく脇の流れを見た。向こう側の斜めに水から出ている半畳敷きほどの石に黒い小さいものがいた。いもりだ。まだぬれていて、それはいい色をしていた。頭を下に傾斜から流れへオノゾんで、じっとしていた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸ほど流れている。自分はそれを何気なく、しゃがんで見ていた。自分は先ほどいもりは嫌いでなくなった。とかげは多少好きだ。やもりは虫の中でも最も嫌いだ。いもりは好きでも嫌いでもない。十年ほど前によく蘆の湖でいもりが宿屋の流し水の出る所に集まっているのを見て、自分がいもりだったらたまらないという気をよく起こした。いもりにもし生まれ変わったら自分はどうするだろう、そんなことを考えた。その頃いもりを見るとそれが思い浮かぶので、いもりを見ることを嫌った。しかしもうそんなことを考えなくなっていた。自分はいもりを驚かして水へ入れようと思った。不器用に体を振りながら歩く形が思われた。自分はしゃがんだまま、脇の小まりほどの石を取り上げ、それを投げてやった。自分は別にいもりを狙わなかった。狙ってもとてもあたらないほど、狙って投げることの下手な自分はそれが当たることなどは全く考えなかった。石はコツといってから流れに落ちた。（　1　）（　2　）自分はどうしたのかしら、と思って見ていた。最初石が当たったとは思わなかった。（　3　）（　4　）（　5　）（　6　）自分はとんだことをしたと思った。虫を殺すことをよくする自分であるが、Aその気が全くないのに殺してしまったのは自分に妙な嫌な気をさした。（　b　）自分のしたことではあったがいかにも偶然だった。いもりにとっては全く不意な死であった。自分はしばらくそこにしゃがんでいた。いもりと自分だけになったような心持ちがしていもりの身に自分がなってその心持ちを感じた。かわいそうに思うと同時に、B生き物の寂しさをいっしょに感じた。自分は偶然に死ななかった。いもりは偶然に死んだ。自分は寂しい気持ちになって、ようやく足元の見える道を温泉宿のほうに帰ってきた。遠く町外れの灯が見え出した。死んだ蜂はどうなったか。その後の雨でもう土の下に入ってしまったろう。あのねずみはどうしたろう。海へ流されて、今頃はその水膨れのした体をごみといっしょに海岸へでも打ち上げられていることだろう。そして死ななかった自分は今こうして歩いている。そう思った。自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬような気もした。しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。生きているということと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。もうかなり暗かった。視覚は遠い灯を感ずるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、いかにも不確かだった。ただ頭だけが勝手に働く。それがいっCそういう気分に自分を誘っていった。

問一　二重傍線部**ア**～**オ**の片仮名を漢字に改めなさい。

問二　空欄部ａ、ｂに当てはまる語を、次の**ア**～**オ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ａ　**ア**　わくわくと　**イ**　そわそわと　**ウ**　いらいらと　**エ**　はらはらと　**オ**　ふらふらと

ｂ　**ア**　もとより　**イ**　かえって　**ウ**　それゆえ　**エ**　ただ　**オ**　もちろん

問三　空欄部１～６に当てはまる文を、次の**ア**～**カ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　尾は全く石についた。
イ　いもりの反らした尾が自然に静かに下りてきた。
ウ　いもりは尻尾を反らし、高く上げた。
エ　もう動かない。いもりは死んでしまった。
オ　石の音と同時にいもりは四寸ほど横へ跳んだように見えた。
カ　すると肘を張ったようにして傾斜に堪えて、前へついていた両の前足の指が内へまくれ込むと、いもりは力なく前へのめってしまった。

問四　波線部Ａ「その気」の指している内容を、十五字以内で答えなさい。

問五　波線部Ｂ「生き物の寂しさをいっしょに感じた。」とは、どのようなことか。本文中の言葉を使って三十五字以内で答えなさい。

問六　波線部Ｃ「そういう気分」とは、どのようなことか。「自分」と「いもり」をどう対比させているかに留意して、六十字以内で答えなさい。

問 六			問 五		問 四	問 三	問 二	問 一
						1	a	ア
						2	b	
						3		イ
						4		
						5		ウ
						6		
								エ
								オ

学 年
組
番 号
氏 名
得 点

城の崎にて（志賀直哉）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　問二・問三は微妙な言葉の使い方を問う設問。問四では、いもりが死ぬ瞬間がどのように表現されているかを確認させたい。問五・問六では、いもりの死を通して、「自分」が持つに至った思い、つまり、生き物は偶然に支配される寂しい存在であり、また生と死とは両極のものではないという認識が読み取れているかを聞こうとしている。

☆解答例と配点

問一　**ア**　道幅　**イ**　人家　**ウ**　不思議　**エ**　怖　**オ**　臨　〈2点×5〉

問二　a　イ　b　ア　〈2点×2〉

問三　**1**　オ　**2**　ウ　**3**　イ　**4**　カ　**5**　ア　**6**　エ　〈2点×6〉

問四　いもりを殺そうとする気持ち（十三字）〈5点〉

問五　いもりも自分も生死を偶然によって支配されている存在だと考えたこと。（三十三字）〈9点〉

問六　いもりは偶然に死に、自分は偶然に助かったのであり、生きていることと死んでしまうことには差はないように思えたこと。（五十六字）〈10点〉

計50点

城の崎にて（志賀直哉）　＊＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

一人きりで誰も話し相手はない。読むか書くか、ぼんやりと部屋の前の椅子に腰かけて山だの往来だのを見ているか、それでなければ散歩で暮らしていた。散歩する所は町から小さい流れについて少しずつ上りになった道にいい所があった。山の裾（ア）を回っている辺りの小さなふちになった所にやまめがたくさん集まっている。そしてなおよく見ると、足に毛の生えた大きな川がにが石のようにじっとしているのを見つけることがある。夕方の食事前にはよくこの道を歩いてきた。冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡（イ）を小さい清い流れについていくとき考えることは（　a　）沈んだことが多かった。寂しい考えだった。しかしそれには静かないい気持ちがある。自分はよくけがのことを考えた。一つ間違えば、今頃は青山の土の下にあおむけになって寝ているところだったなど思う。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷もそのままで。祖父や母の死骸が脇にある。それももうお互いに何の交渉（ウ）もなく、――こんなことが思い浮かぶ。[B]それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった。いつかはそうなる。それがいつか？――今までにはそんなことを思って、その「いつか」を知らず知らず遠い先のことにしていた。しかし今は、①それが本当にいつか知れないような気がしてきた。自分は死ぬはずだったのを助かった、何かが自分を殺さなかった、自分にはしなければならぬ仕事があるのだ、――中学で習ったロード・クライブという本に、クライブがそう思うことによって激励（エ）されることが書いてあった。実は自分もそういうふうに危うかった出来事を感じたかった。そんな気もした。しかし妙に自分の心は静まってしまった。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた。

自分の部屋は二階で、隣のない、わりに静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になっている。その羽目の中に蜂の巣があるらしい。虎斑の大きな太った蜂が天気さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しそうに働いていた。蜂は羽目のあわいからすり抜けて出ると、（　1　）玄関の屋根に下りた。そこで羽や触角を前足や後足で丁寧に調えると、（　2　）歩き回るやつもあるが、（　3　）細長い羽を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。飛び立つと（　4　）早くなって飛んでいく。植え込みのやつでの花がちょうど咲きかけで蜂はそれに群がっていた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出はいりを眺めていた。

ある朝のこと、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。足を腹の下にぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へ垂れ下がっていた。他の蜂は一向に冷淡だった。巣の出はいりに忙しくその脇をはい回るが　全く交渉（オ）なげである様子はなかった。忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きているものという感じを与えた。その脇に一匹、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずにうつむきに転がっているのを見ると、それがまたいかにも（　b　）ものという感じを与えるのだ。それは三日ほどそのままになっていた。それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。他の蜂がみんな巣へ入ってしまった日暮れ、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見ることは[C]寂しかった。（　c　）、②それにしろ、③それはいかにも[D]静かだった。

夜の間にひどい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根もきれいに洗われていた。蜂の死骸はもうそこになかった。今も巣の蜂どもは元気に働いているが、死んだ蜂は雨どいを伝って地面へ流し出されたことであろう。足は縮めたまま、触角は顔へこびりついたまま、たぶん泥にまみれてどこかでじっとしていることだろう。外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは死骸はそこにじっとしているだろう。それともありにひかれていくか。それにしろ、それはいかにも静かであった。せわしくせわしく働いてばかりいた蜂が全く動くことがなくなったのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた。

問一　二重傍線部**ア**～**オ**の片仮名は漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

問二　空欄部ａ、ｃに当てはまる語を、次の**ア**～**オ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ａ　**ア**　ただ　　**イ**　もちろん　　**ウ**　やはり　　**エ**　いつも　　**オ**　それでも

ｃ　**ア**　しかし　　**イ**　だから　　**ウ**　そして　　**エ**　つまり　　**オ**　なぜなら

問三　空欄部1～4に当てはまる語を、次の**ア**～**カ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　急に　　**イ**　ひとまず　　**ウ**　少し　　**エ**　すぐ　　**オ**　かなり　　**カ**　よく

問四　波線部Ａ「回っている」の主語を本文中から抜き出しなさい。

問五　空欄部ｂに当てはまる語を、本文中から三字で抜き出しなさい。

問六　傍線部①～③の「それ」は何を示すか、それぞれ答えなさい。ただし、①は五字以内でまとめること。

問七　波線部Ｂ「それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった。」とあるが、「自分」がこのように考えるのは、なぜか。六十字以内で答えなさい。

問八　波線部**C**「寂しかった。」、**D**「静かだった。」は、ここではどのような意味を持つ言葉として使われているか。適当なものを、次の**ア**～**カ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　生と対比させて、死をできる限り客観的に捉えようとした言葉。
イ　自分には理解できない死というものを、抽象的に捉えようとした言葉。
ウ　死という自己の消失を意識し、死に対する拒否的な心情を表した言葉。
エ　生き物の絶対的な宿命に対する、やりきれない怒りを表した言葉。
オ　死の絶対的な永遠性を捉えたときに生じる、穏やかな心情を表した言葉。
カ　冷静に死を捉え、宗教的な悟りの境地につながる心情を表した言葉。

問 八	問 七			問 六			問 五	問 四	問 三	問 二	問 一
C				③	②	①			1	a	ア
D									2	c	
									3		イ
									4		
											ウ
											エ
											オ

学 年
組
番 号
氏 名
得 点

城の崎にて（志賀直哉）　＊＊＊

〔出題の意図と留意点〕　問一では、文脈の的確な読み取りを、言葉の使い方から確認しようとした。問二では、「蜂」の様子を捉えた作者の文体に注目させたい。問六・問七は、この作品のテーマにかかわる表現を問う問題である。

☆解答例と配点

問一　ア　すそ　　イ　さんきょう　　ウ　交渉　　エ　激励　　オ　拘泥　〈2点×5〉

問二　a　ウ　　c　ア　〈2点×2〉

問三　1　イ　　2　ウ　　3　エ　　4　ア　〈2点×4〉

問四　小さい流れ　〈3点〉

問五　死んだ　〈3点〉

問六　①　死の到来（四字）　②　蜂の死骸　③　蜂の死骸がありにひかれていくこと　〈3点×3〉

問七　死にかけた体験から、死というものが急に実感され、また同時に死に対する親しみのようなものも感じるようになったから。（五十六字）〈5点〉

問八　C　ウ　　D　オ　〈4点×2〉

計50点